



## ○「ありがとうディスタンス」

隠岐の島ウルトラマラソン 2022 ⇒

「ありがとうディスタンス」を今年のスローガンに、隠岐の島ウルトラマラソンが2回の中止・延期を経て3年ぶりに開催されました。今回で15回目の開催。私にとってはボランティア1回を含め連続6回目の大会でした。隠岐に縁があるマラソンランナーの川内優輝さんも毎回出場されています。コースのほとんどが標高差 100m~200m の山々が連続するコースで、近年は高温・多湿にも悩まされながらの過酷なレースです。川内選手もあいさつで、「この大会でゴール直前に倒れて救急車で運ばれたことがあります。絶対に無理はしないでください。」と注意喚起していました。私も後半は軽い熱中症のような症状となりました。かなりペースダウンしたものの、なんとか50キロの部5回目の完走を果たしました。



しんどくて走れなくても、走ってしまうのが隠岐の島ウルトラマラソンの良さでもあります。数キロごとにある給水・給食所(エイド)を、中高生をはじめとしたたくさんのボランティアの方が運営し、選手が近づくとゼッケンから名前を確認して、遠くから「〇〇さん、ナイスラン。おつかれさま。」などと声援を送りながら、給水所では一生懸命おもてなしをしてくれます。沿道では子どもからお年寄りまでたくさんの人が応援してくれます。各家庭に配られる選手一覧と旗を片手に、ランナーの名前を呼びながら声援を送る人。看板や横断幕をつくって応援する人。太鼓を叩いたり、踊ったり、音楽を流したり奏でたりして応援する人・・・なかでも隠岐の島ウルトラマラソンは私設のエイドが多いのが特徴です。ランナーを上げまし、もてなそうと思いいのものを用意してランナーを待っています。飲料水、飴、パン、おにぎり、果物、チョコ、ゼリーなどをはじめ、絞った果物ジュースやケーキ、たこ焼き、焼き鳥もこれまでにありました。ラスト10キロの岬コースは、夕方で海風も吹くことから肌寒く感じることもあります。そのため暖かいコーヒーをふるまうエイドが出てきます。疲れた身体を気遣った甘い卵焼きに暖かい味噌汁をふるまってもらったこともあります。エアサロンプラスもあちらこちらで差し出されます。

ラスト10キロほどになると、声援が「頑張れ」から「おかえりなさい」に変わってきます。長く続く山道の連続を走りながら隠岐の島を一周し、ゴール会場近くまでよう頑張って帰ってきたねという意味です。

今回は、感染症対策で、声を出しての応援やランナーに近づきハイタッチする行為などは禁止とされ、ランナーもエイドではセルフサービスとなっていました。もちろん私設エイドは禁止。しかし、隠岐の人はそれを守りながらも、できる最大限の工夫や配慮をして応援をしてくれました。そういう意味では応援などは例年よりさみしさを感じることもありました。これまでの大会より温かい気持ちがより伝わってきました。物理的なディスタンス(距離)は感染症対策からも大事ですが、心の距離は感じませんでした。

毎回ランナーには島の小学生から手書きの激励メッセージが届きます。加えて今回は完走者に手作りメダルがありました。私のメダル裏面はろうそく岩の絵。もちろん一人一人絵は違います。

ある新聞でも、100キロの部で2位に入った雲南市の方の「拍手が力になり、歩こうと思って歩けなかった」という沿道の応援に感謝するコメントが紹介されていました。

ボランティアの方々がランナーの走りやすいように草木を伐採され気持ちの良い道路脇を、沿道の応援やふるまいをはじめ隠岐の人のやさしさや温かさに触れながら、また隠岐の景色の素晴らしさを堪能しながら走ります。山越えばかりでかなり過酷ですが、最後はもう少し走っていたい気持ちになっていきます。ゴール付近では、中学校や高校の吹奏楽部が祝福演奏してくれます。残念ながら試験期間中の時期で例年17時過ぎまでなので、私は1回も聴いたことがありませんが……。こうした中で、感動が島を一周し、ゴール会場で気遣いに対する感謝の気持ちとともに心が一つになっていきます。

最後 2 キロの町中に入った時、久しぶりの大会ということもあって交通整理にとまどい大渋滞が起きていました。しかし、誰一人いらだつようなこともなく、私も走りながら警官に「暑い中大変ですね。お疲れ様です。がんばってください！」と声をかけたら「ありがとうございます。がんばります。」と返してくれました。言葉かけが逆かなと思いつつながら心がほっこりしました。途中足が痙攣しうずくまっているランナーを少し介抱しました。あなたが遅れては申し訳ないから先に行ってくれと言われ走り出したのですが、途中で「ありがとうございました。元気になりました！」って追い抜かれました。そんな光景があちらこちらで見られます。励まし合い、支え合い、助け合いの中で大会が盛り上がっていきます。

私は2回隠岐に赴任しました。教え子や元同僚、友人や知り合いなどと数秒間の再開を果たしながら走りました。「先生おかえり！来年も待っているよ！」というメッセージに胸が熱くなる一日でした。